

LSC NEWS LETTER

Learning Support Center 広島修道大学
学習支援センター

2020 No.30

広島修道大学
Hiroshima Shudo University

Contents

コロナ禍における学習支援センター…1 オンラインによる修大基礎講座…2 つながる学習支援、広がるまなびの可能性…4
新任学習アドバイザー挨拶…6 LSC 資料紹介…7 <学び★サプリ>黒は悪なのか・これからの学習支援センターに向けて・編集後記…8

コロナ禍における学習支援センター

○ 学習支援センター課長 富永あゆみ

2020年、新型コロナウイルス感染症の影響により、世界中のあらゆるものが大きく変化しました。これは、慣習や生活様式なども一変してしまうほどの誰も想像しえなかった状況で、私たち長く教育機関に携わるものにとっても、「大学内に学生の姿が全くない」「大学の授業がすべて遠隔で行われる」という前代未聞の出来事でした。4月16日全国に緊急事態宣言が出され、その後5月25日に解除されてからは徐々に経済活動を再開すべく動き出しましたが、その途端、日に日に感染者数は拡大し、いつだれが感染しても不思議ではないという状況が今も続いています。

この『LSC NEWS LETTER』も、例年は7月・12月・3月の年3回刊行していましたが、相次ぐ学内行事の中止により、今年度は時期を遅らせての刊行となりました。

学習支援センターにおけるコロナ禍の影響は、3月4日に開催予定であった「2020年度入学予定者対象入学準備学習プログラム（第2回キャンパス学習）」の中止に始まり、これは、総合型選抜・学校推薦型選抜等の早期合格者に対し、合格決定から入学までの間を大学への入学準備期間と位置づけ、少しでも早く本学の雰囲気慣れてもらいたいと行うもので、通信学習と、12月と3月の本学でのキャンパス学習で様々なプログラムを実施しています。昨年12月に開催された第1回キャンパス学習で初々しい高校生たちと接し、今年3月の第2回キャンパス学習でも再び元気な高校生たちに会えることを楽しみにしていましたが、2月24日に出された「新型コロナウイルス感染症対策専門家会議」の見解を受け、開催中止を決定しました。一緒に入学する仲間と出会い、大学教員や先輩たちと触れ合い、キャンパスの雰囲気を味わうことのできる大切な機会でしたが、全国から参加してくれる高校生たちの安全を考えれば致し方ないことでした。

この後も、大学は大きく変わることになります。学習支援センターは、「初年次教育を通じた自立的学習者の育成」を目標とし、1年次生全員が受講する修道スタンダード科目の「修大基礎講座」の部局担当授業の運営を行っています。本学は、当初4月6日から前期授業開始予定でしたが、5月7日からはすべての授業（一部実習科目を除く）を非対面で行うことが決定し、当初は対面授業で準備を進めていたこの授業についても、これまで私たちがほとんど触れたことのない Google Classroom や Moodle などの遠隔授業ツールで行うことになり、悪戦苦闘の末に何とか5月7日に授業を開始することができました。担当の先生方や担当部局の方々にも短期間で遠隔授業対応にご協力いただき感謝申し上げます。（これについては、P.2-3で詳しく述べています。）

こうして、例年であれば、4月からは、仲間と一緒に授業、サークル活動、友達作りと、充実したキャンパスライフが始まるはずだった新入生は、ほとんど大学に通うことができないまま自宅等で授業を受けざるを得ない状況となり、このコロナ禍での大学生活の始まりという現実はとても残念なことだったと思います。学習支援センターでは、このような状況でも、でき得る限りの支援を行っていきたく、学習アドバイザーによる、レポートの書き方、大学での学びの進め方、英語・TOEIC等の勉強の仕方についてなどの学習相談やワークショップやスタディグループなどを、Zoom・電話・Eメールを使った遠隔での対応で実施し、多くの方に参加していただきました。

私たちは、これからは新型コロナウイルスと共存しながら生活を送っていかねばなりません。このピンチをチャンスととらえて、この困難な状況であっても、今できること、やるべきことをみんなで話し合いながら、引き続き、学生の学びのサポートを行っていきたく考えています。

特集

オンラインによる修大基礎講座

学習支援センター長 森河 亮

前項の内容にもあるように、本学は新型コロナウイルス感染防止の観点から、2020年度前期のすべての授業を原則、非対面型で行うことが決定しました。通常であれば、4月6日から授業が校内で行われるはずでした。それが、一度は「4月20日より一部の対面によらない授業（オンライン授業等）を開始し、5月7日から対面による授業を開始する」という決定をした後に、緊急事態宣言が発表されたことを受け、「5月7日よりすべての授業を原則、非対面型で行う」ことに変更、最終決定になりました。8月下旬にこの文章を書いています、この決定が4月17日だったこともあり、初めてのオンライン授業実施に向けて、ゴールデンウィーク前の2週間で大慌てで「修大基礎講座」の授業準備をしたことを覚えています。

「オンデマンド型」採用の経緯

まず検討したのが授業を配信するタイミングと方法です。候補は、Zoom、Google Classroom、Moodle、You Tube などがありませんでしたが「修大基礎講座」は、すべての学部で1年生が受講する履修必修の科目です。履修を希望する学生のみで授業であれば、こちらからシラバスなどを通じて提示する条件を確認し、条件に満たなければ履修をあきらめる、という選択肢があると思いますが、「履修必修」という条件であれば、望む・望まないということに関係なく、履修しなければなりません。そのため、学生に負担を強いるような授業は提供できないと考えました。その結果、「修大基礎講座」が開講される曜日時限に履修生が一度にオンライン上に会してオンタイムで行う同時双方向型の授業は早くに候補から消えました。オンタイムの授業は、その日その時にインターネット環境が整っている場所にいないと授業が受けられないからです。本学の1年生約1,500名全員がこの条件を満たすことは、まず無理だと考えました。必然的に、定められた期限内に自分の好きな時間で授業を受ける「オンデマンド型」での配信に決定しました。

配信する方法の決定に際しては、「修大基礎講座」の授業の目的と授業手法から候補を絞りました。「修大基礎講座」の授業の目的は、「一年次生が大学での学びや大学生活に円滑に移行するために、大学生としての態度や姿勢を身につけ、大学の学びに必要な学習スキルを習得すること」です。そして、これらの習得に際してはワークを取り入れ、他者との意見交換を交えながら学びを深める授業手法を採

用しています。このような特徴から考えると、提示された指示書を確認し履修生自身で調べ学習をするスタイルなどはふさわしくないと考えました。入門科目であるため、丁寧な指示が必要でしょうし、ワークを多用して考えさせるために適切な発問が必要だと考えました。そして、授業動画を作成し、その動画を視聴しながら履修生が実際に手を動かし、思考を深めるスタイルに決定しました。

授業運営方法の検討

授業動画作成にはZoomを利用しました。ミーティングの録画機能を利用すると、パワーポイントに音声を録音した同じ再生時間のファイルと比較して、かなり小さな容量で動画ファイルが作成できるからです。履修生のインターネット環境への負担を考えると、授業動画ファイルが小さいに越したことはありません。ただし、容量が小さいといえども60分程度の動画ファイルで70Mbくらいの容量があります。学習支援センターの意図としては、授業動画は該当する授業期間が過ぎても繰り返し視聴してほしいと考えていたので、次の授業動画ファイルをアップしても過去の授業動画ファイルはそのままオンライン上に提示することを考えました。この当時のMoodleは1コース当たり256Mbまでという制限があったため、授業動画ファイルを7回の授業分アップロードすることができません。そのため、少し変則的ではありますがGoogle Classroomに授業動画ファイルをアップロードし、履修生はその動画ファイルを視聴しながらMoodleに提示されているワークシートに記入して学習を進め、受講後に確認テストを実施し、その後その授業回の提出課題に取り組む、という授業設計にしました。

成績結果および検証

ここからは、このような授業を行った検証をしたいと思っています。まず成績です。「修大基礎講座」は部局が担当する授業と教員が担当する授業に分かれています。ここでは部局が担当する授業回についてのみ検証します。部局が担当する授業回の総得点の全学科の平均点は、2020年度が46点満点中33.8点、2019年度が同34.7点と約1点下がっています。特に顕著なのが、「ノートテイキング」の授業回の得点減少で、2019年度の全学科の平均点が7.7に対して、2020年度は7.1となっています。この原因としては、オン

ライン授業の第1回目であったことが大きく影響しているように思います。生まれて初めての大学の授業、しかもオンラインでの授業ということもあり不慣れだったこと、加えて、一つの授業で Google Classroom と Moodle を併用するという煩雑さも影響したのだと思います。同様の影響は5月末日を提出締め切りにしていた2回目および3回目の授業にもあったように思われ、それぞれの2019年度の全学科の平均点は6点満点中4.3点と10点満点中7.9点で、2020年度の同4.1点と7.1点、はそれぞれ低くなっています。一方、6月末日を提出締め切りにしていた4回目から7回目の授業では、2019年度の全学科の平均点と比較して0.2~0.4点高くなっており、オンライン授業への慣れがうかがえます。0.4点高くなった課題で一つ興味深かったのは、誤字による減点が極端に少なかったことです。この授業回の内容には「研究倫理」に関する内容が含まれ、課題では「特定不正行為」を解答する箇所がありますが、2019年度までは対面型の授業であったこともあり、課題は授業中に配付する提出用のシートに手書きで答えを記載していました。すると「捏造」の漢字の誤字が頻発し得点を下げていましたが、今年度はオンライン上で記述し提出するため、「ねつぞう」と記載し変換すれば「捏造」以外の漢字表記は何も表示されず、誤字による減点は0名でした。オンライン授業の利点と言ってしまうえば簡単ですが、実際に自分の手で書き記憶する作業が省略されてしまうので、複雑な思いがします。

オンラインでの課題提出でもう一つ特徴的だったのが、「文章量の二極化」です。対面型の授業で配付していた提出用のシートは、解答を記述する欄があらかじめ設けられています。授業中には、「解答は箇条書きなどではなく、文章で解答欄の8割程度を目安に書くこと」を推奨する旨を伝えていました。しかし、オンライン上で設定した解答欄は、一定の大きさが設けられているわけではなく、少なくとも欄の8割が埋まったように見えます。逆に、書けば書くほど欄は後ろに伸びていくためいくらでも文章を書くことができます。そのため、短い解答と適切な量やそれ以上の量の解答に大きく差が出ました。解答に際しては「○文字程度で記述しなさい」などの指示が必要であったと反省しています。

授業アンケートから

「修大基礎講座」を履修した学生からのフィードバックを得るため、また今回の授業内容や授業設計に関する検証を行うために、Moodleで授業アンケートを行いました。回答率は85.3%でした。ここからはその結果の抜粋について記載します。

部局授業の7回分について、それぞれ「授業内容は理解できましたか」の問いに「十分理解できた・ある程度理解できた・あまり理解できなかった・全く理解できなかった」

の中から一つを選択させた結果、「十分理解できた」と「ある程度理解できた」を合わせた割合は、すべて93%以上となり、うち6回分の授業は95%を超えました。オンデマンド授業ではあったが、概ね授業の目的は達成できたのではないかと感じています。

同じアンケートの自由記述欄を見ると、「この授業を受けてよかったと感じたことを教えてください。」の問いに対しては、「広島修道大学そのものを知れたこと」「高校と大学での違いを知れたこと」「大学生活で気をつけることが理解できた」「図書館の活用法が理解できた」「時間の使い方や時間管理の重要性が知れた」など多岐にわたる記述が見られましたが、最も多いと感じたのが「レポートの書き方」に関する記述でした。2020年度前期の科目がすべてオンラインになったことで従来よりもレポート課題が増え、それによるレポート作成に関する知識やスキルの必要性を感じての結果ではないかと考えています。

一方、「遠隔授業を受けてみて、改善点や分かりにくかったことなどがあれば教えてください。」の自由記述には、「Google Classroom と Moodle 両方あって分かりにくく、どちらかに統一してほしい」と旨の意見が最も多かったです。加えて、「オンデマンドの授業動画を一方的に観るだけなのはつらい」「周りの人の意見を聞けなかった」「グループワークができない」「より理解を深めるための質問や違う観点を聞くことなどができない」など、オンデマンドでの授業という授業設計そのものから生じる欠点についての記述も多く見られました。これらのことに関しては、双方向性のオンライン授業であれば解消できるのですが、その手法が取れないオンデマンドの授業においてどのような改善ができるのか、悩ましいところです。

今後に向けて

来年度以降も「修大基礎講座」の授業は開講されます。来年度は新型コロナウイルスの影響を受けず、従来通り対面型で授業を行い、オンデマンド授業であるが故の上述の欠点を払拭する授業を行えることを願っています。ただ、アンケートの自由記述欄には「授業動画を何度も繰り返し観られたのでよかった」旨の記述も多く、オンデマンド授業の利点も確認することができました。聞くことや書くことにハンディキャップを持つ学生、大勢の中に身を置くことができない学生、対人関係を築くことが苦手な学生など多様な学生が存在します。オンデマンド授業の恩恵を受けることで学習をよりスムーズに進められる学生がいることも事実です。2021年4月がどのような状況になっているのか分かりませんが、すべての1年生が履修必修であることを考えると、対面型授業とオンデマンド型授業の併用という新たな「修大基礎講座」の形も悪くないのかも知れません。

つながる学習支援、 広がるまなびの可能性

学習アドバイザー 是澤 克哉

激動の前期を終えました。4月の新入生ガイダンスではワークショップのチラシを配り、各部署にイベントのポスターを貼り、サイネージを更新し、新入生を迎え入れる準備を整えていた矢先、学生の大学への入構が禁止となり、授業もすべてオンラインに切り替わりました。当初、計画されていた対面でのワークショップは、延期を重ね、三度も形を変え、ついには遠隔（Zoom）での開催となるなど、すべてが手探りで進められました。今回の特集では、2020年度前期に実施した遠隔でのワークショップとスタディグループにおける学習支援について取り上げます。

2020年度前期 ワークショップ一覧

| | | | |
|------|------------------------------------|------|--------------------------------|
| 4/21 | 英語 Start Up! 講座 - TOEIC Bridge®編 - | 6/2 | 大学生の基礎英語 - TOEIC Bridge®編 - |
| 4/30 | レポート作成 Start Up! 講座 | 6/16 | TOEIC® L&R Test 講座 - リスニング編 - |
| 5/15 | レポート実践講座 | 6/23 | TOEIC® L&R Test 講座 - リーディング編 - |
| 5/19 | レポート実践講座 | 6/25 | レポート作成 Start Up! 講座 リターンズ |
| 5/21 | プレゼン入門講座 | 7/2 | レポート講座 - 書き始めるまえに - |
| 5/26 | 論述試験対策講座 | 7/9 | レポート講座 - 説得的な文章を目指して - |

つないだ学習支援

レポート関連ワークショップの遠隔開催で良かった点は、レポート作成の基礎的な講座を、時期を変えて、複数回実施できた点です。4月に「レポート Start Up! 講座」として、レポートを作成したことが無い学生が基礎的な知識を得られる講座を設けました。しかし、4月の段階では、オンラインでの講座開催の情報が得られず、レポートの知識が必要な学生に届かなかったのではないかと考えました。そこで、学期末レポートが課される時期に「レポート Start Up! 講座 リターンズ」として再度開催しました。これにより、のべ136名の学生が参加し、必要な時期に必要な講座を提供することができました。また、講座の資料を Web 上に公開するなど、学びの支援が広がったと思います。今後も、状況に応じた柔軟な講座スケジュールを組んでいきたいです。

英語に関するワークショップでは、例年好評だった対面での TOEIC 関連講座が、公開テストや、1年生対象のプレイズメント（クラス分け）テスト中止の影響を受け、遠隔開催となり、参加人数を大きく減らしました。しかし、参加した学生たちは、新たな学びの場を求めて、スタディグループに参加するなど、継続した学習支援につながったことは収穫でした。

また、対面では90分の内容を、遠隔では50分に短縮し、替わりに同じ内容を昼休みと午後3時の2回開催しまし

た。授業開始に先駆けて行った講座のアンケートでは、「Zoomでの学習を一足先におこない、どのようなものかを知ることができました」とあり、授業開始前の期間に学生を支援できたことは良かったです。今後は、講座を録画し Web 上に配信するなど、新たな学びの機会を広げたいと思います。



参加者の声

- ◆ レポートの書き方について、本で見ただけではわからないことが多く学べました。（法・1年）
- ◆ レポート作成をした事がなくて不安でしたが、今回の講座を受ける事で作成方法や手順を知る事ができ、不安が無くなりました。（商・1年）
- ◆ 長い文章を書くのが苦手ですが、今回教えてもらったポイントを生かして、書き慣れていきたいと思います。（地域・1年）
- ◆ （遠隔開催でも）実際に皆の顔を見て学習できるので、安心して受けられました。（地域・1年）
- ◆ TOEICは時間配分が大切だと分かりました。（国政・1年）
- ◆ リーディングの問題を実際に解き、質問もできたのでとても良かったです。（地域・3年）



LGBTを議論する

昨年度、人文学部の河口和也先生をドキュメンタリーアワーにお招きして以来、LSC スタディグループの一つであるディベートクラブでは、LGBTの議論を深めてきました。毎週水曜日に集まり、先生の著書である『同性愛と異性愛』を読み、各章ごと学生たちは発表し、日本の社会や教育機関における性のあり方について議論を重ねてきました。その集大成が、7月15日(水)に遠隔(Zoom)開催した河口先生をお招きしてのパブリックディベートでした。ここでは、広がるまなびの可能性として、オンラインでの学生たちのディベート活動を紹介します。

<当日のスケジュール>

1. パブリックディベート

論 題：「日本はすべての男子校・女子校を共学にするべきである。是か非か。」

肯定側：楠 啓史 (人文学部英語英文学科2年)

小林 薫 (人文学部教育学科3年)

否定側：渡邊伊織 (人文学部英語英文学科3年)

高尾紗弥 (人文学部英語英文学科3年)

ディベートの形式

| 順 番 | 役 割 | 時 間 | 担当者 |
|------|-------|-----|-------|
| 1 | 肯定側立論 | 4分 | 楠 |
| 2 | 否定側質疑 | 2分 | 渡邊・高尾 |
| 3 | 否定側立論 | 4分 | 渡邊 |
| 4 | 肯定側質疑 | 2分 | 楠・小林 |
| 5 | 否定側反論 | 3分 | 高尾 |
| 6 | 肯定側反論 | 3分 | 小林 |
| 準備時間 | | 5分 | |
| 7 | 否定側総括 | 3分 | 渡邊・高尾 |
| 8 | 肯定側総括 | 3分 | 楠・小林 |

肯定側は、「共学によって多様な性が共存する学校環境が実現できる」、「一人ひとりを尊重した教育が可能」、「性への偏見をなくすことができる」という3つの論点から男子校と女子校は廃止すべきと論じました。崇徳学園が共学に変更した例やスウェーデンの個を尊重する教育を、性についても当てはめる必要があると述べ、偏見をなくす共学の多様性を論じました。

否定側のスタンスは、むしろ「日本全国の共学校を全て男女別学にするべきだ」と、男子校・女子校出身者の経験を生かし、真っ向から対立する立場をとって迎え撃ちました。その理由として、男女別学は、学力を伸ばす効率が高いことを証明し、海外での男女別学の増加や日本の進学校

を例にあげました。また、男女共学こそ、男女差別のはびこる日本社会の縮図であるとし、男子校・女子校の方が偏見を気にすることなく自らの性を自由に表現できると主張しました。

II. 講評

ディベート後、河口先生は、女子校と男子校の問題は、ジェンダーの権力関係、非対称性が根源的にあること、「学力=偏差値」なのかの二点に分けて講評されました。

まず、教育は男子が受けるものであった経緯を考えると、男子校と女子校は並列的に論じることができるのか。たとえば、最新のジェンダーギャップ指数の教育の項目では、大学院と学部を合わせた女子学生の在学の割合は32.4%で、高等教育における男女の差はまだ開きが大きく、このジェンダーの非対称性を議論の項目に入れるとどのような議論が展開されるのか楽しみだと話されました。

次に「学力=偏差値」の問題では、やや一面的かもしれないと前置きされ、勉強に集中できるという背景には、性のことに煩わされないことが裏にあり、片方の性を遠ざける仕組みとなってしまう。つまり、勉強の効率化は、排除の問題とつながっているのではないかと指摘がありました。たとえば、女子大におけるトランスジェンダーの排除やトイレや更衣室の問題も、効率と排除の関係にあると述べられました。

講評後、質疑応答の時間を設け、学生たちと河口先生が対話し、ディベートの熱気そのままに大変盛り上がりしました。おわりに、ディベートを体験した学生のコメントを紹介します。

◆ 『同性愛と異性愛』を読んで、LGBTの歴史や環境を理解しようとしていなかったこと、多様な性があることに気づきました。私は肯定側に立ち、共学にすれば多様な性が一緒に学べると発言しましたが、たとえ共学でも男女に分かれざるをえない状況になったら、性別がない人が苦しむことに気がきました。今回のディベートを通して、先入観を持たないこと、異なる意見を理解しようとすることで共生ができるようになるのだと思いました。(小林薫)

◆ 今回取り扱った「性」の問題は、はっきりした答えを導き出せるものではありませんが、話し合うこと、お互いの意見を交換して議論を深め合うことに意義があると思います。ディベート後は自分自身の変化よりも周りの人の無関心や差別意識に気がつくようになり、改めてディベートの良さを感じる経験になりました。(高尾紗弥)

末筆ながら、ご多用の折にも関わらず、講評をいただきました河口先生に感謝申し上げます。今後もまなびコモンズでは学生たちが議論する場を創っていきたく思います。

新任学習アドバイザー挨拶

学習アドバイザー 宮原 千咲



2020年4月に、学習支援センターに学習アドバイザーとして着任しました。学生に直接関わることができる学習支援センターで働くことができ、これからどんな学生に出会えるか楽しみです。

広島修道大学に来るまでは、教員や職員の立場から日本語教育や初年次教育、学習支援に従事していました。もともとは日本語教育を専攻しており、卒業後に就いたのは日本語教師でした。希望を叶えたものの、業務に追われ、本務である授業はこなすだけになってしまっていることに気がつき、立ち止まることにしました。自分にとって「教育とは何か」「学生のために何をしたいのか」を立ち返り、学習支援の道に入り、自分にとっての教育を見つめ直すことに決めました。そこに、自身が求める「教育」のヒントがあるのではないかと思ったのです。

社 会の変化に供って、社会人に求められる力も変わります。近年は、世の中の状況を考慮すると、今後は主体的に自ら考え行動する力が一層に重要になっていきます。他にも、仲間と協働する力、協働するためにも伝える力も必要になっていくでしょう。広島修道大学の学生には、学生生活の中で、このような社会で生き抜く力をぜひ身につけてもらいたいと思います。例えば、社会で求められる力の中に問題解決力などがあります。それを鍛えるにも、まずは適切に問題を見抜き、適切な解決方法を選択できなければなりません。それには論理的に考える力、論拠を基に論じる力、多角的にみる力、情報収集力などが必要になります。これらの力は、授業を適切に受けていくと少しずつ向上させていけるでしょう。このような力を育てていくのにアカデミックスキルが関係してきます。私は学習支援センターで、そういったアカデミックスキルを向上させられる機会を提供していきたいと思います。

学 習支援を行う際、自律的な学びの支援を行うという姿勢を心がけていきたいです。ワークショップや学習相談の中で、学生が考え、体験し、振り返り、学び合う機会を設けることを大切にしたいです。例えば、ライティングの相談においては、こう書き直しなさいとこちらが言うのではなく、対話を通し、自分の考えが相手に伝わる文章になっているのか書き手である学生自身が確認し、文章をより良くするにはどう書けばいいか考える機会を作りたいと思います。知らなければ書き進められないというような書くための基礎的な知識を教えることはあるでしょう。しかし、文章で書き表し、伝えたいことは書き手

の中にあるので、こちらが「正解」の文章を教えたりすることはできません。そこで、学生が書いたレポートを一方的に添削するのではなく、対話を通して学生自身に気づかせることで、学生のライティングスキルを育て、自律的な学習者への一歩を踏み出す支援を行いたいと思います。

現 在、様々な学習支援を行っており、その中でも特に重要なのは学習相談だと考えています。ここから、学生一人一人に合わせた様々な支援が行えるからです。もし、学生がレポートの相談を持ってきた時、学生が書いてみた文章に不安を抱えているなら、そのままレポートの相談を行いますし、レポートの書き方がわからず、困っている状態ならワークショップやスタディグループへの参加を促したりします。または、学生が自身で進められるような状態で、最終チェックをしてレポートを提出するだけということなら、ハンドアウトを提供し、使い方を説明します。学生一人一人に寄り添い、その学生が抱えている課題と一緒に向き合い、その問題点や解決方法を学生自身が発見できるように相談に乗っていければと思います。私の喫緊の課題としては、まずは、気軽に相談に来られる場作りだと思っています。様々、模索していきたいです。

私自身ができる支援は限られますので、他のアドバイザーや職員、教員と連携し、様々な方向から包括的な学生の支援ができればと思います。



今 年度はコロナの影響で、以前までとは異なる学び方が求められ、学生の皆さんは本当に大変な前期を過ごしたと思います。しかし、「こんな状況だから…」と後ろ向きに捉えず、新しいきっかけということで、主体的に学んでいってもらえればと思います。学びの主役は学生です。学生が自身の持っている力を発揮し、さらに伸ばしていけるよう支援をしていきたいです。

後期はオンラインと対面で学習相談やワークショップ、スタディグループを実施しています。学生の皆さん、ぜひご利用ください。協創館1階でお待ちしております！

LSC資料紹介

学習アドバイザー 宮原 千咲

学習支援センターでは、大学教育、初年次教育、アクティブラーニングや授業手法などに関する図書を収集しています。貸出もおこなっていますので、気軽に学習支援センター（協創館1階）までお問い合わせください。

『AI時代の教師・授業・生きる力 — これからの「教育」を探る —』

渡部 信一 編著／ミネルヴァ書房(2020)



確実に来る新しい時代に
対応した「教育」を考
えるのに、有益な本を紹介し
ます。

社会の変化に伴い、教育
も変わろうとしていま
す。近年、「人工知能 Artificial
Intelligence：AI」が急速に
社会に浸透してきました。イ

ンターネットによってさまざまなものがつながり、収集されたビッグデータをAIが解析し、複雑な判断を伴う労働やサービスの提供が可能になるといった話を、2010年過ぎから頻繁に耳にするようになりました。いわゆる「第4次産業革命」です。政府は、2016年の「第5期科学技術基本計画」で、その技術革新を取り込み、「超スマート社会」の実現を目指すことを確認しています。そして、日本が世界で第4次産業革命を引っ張っていきけるよう、人材の育成に乗り出し始めました。今後は、AIも含めICT教育が教育現場で盛んになることは間違いありません。

社会が変われば、必然的に「教育」にも大きな影響
があります。本書では、人間の知的作業はすべて
「人工知能」に取って代わられてしまうのではないか、
そうなった場合、学校では、どのような「教育」を行え
ばよいか、学校では、何を教えればいいのかといった疑
問を出発点にし、これからの時代の「人工知能に負けない
能力」やそのような能力を身につけるための「教育」
とは何かを、本質から今一度考え直しています。

本書は3部で構成され、題名の通り3つのテーマで進
められています。まず、AI時代の「教師」について教
員養成・教員研修という視点から、次に、AI時代の「授
業」に関して国語・社会と数学・理科およびプログラミ

ング教育という視点から、最後に、AI時代における「生
きる力」の育成について、検討されています。これら3
つの話題に対して、8名の実践研究者が考えを提示し、
さらに、著者同士が意見を交わすパートがあります。そ
れぞれの分野から、今後の「教育現場」を探っています。

本書で印象的なのは、対話形式のパートです。対話
形式を採用し、ディスカッションに近い形で読者
に提示するこの形式により、各著者が担当したパートだ
けでは述べきれなかった、著者の考えの背景などが補填
できています。これにより、各著者が持つ教育観をより
深く理解することができるでしょう。

また、ディスカッション中の著者らの姿勢も印象的
です。AIをどのように教育現場に取り入れるべきか、前
向きに検討しています。世間では、AIが話題となると
き「人間に取って代わってしまうのではないか」などと
議論的になることが多々あります。しかし、本書では
取って代わる・代わられるという関係性で論じるのでは
なく、来るべき時代に備え、ある意味AIを「パートナー」
として現場に迎え入れ、「教育」の本質から建設的な検
討を行っています。このような姿勢から、お互いの意見
が刺激となって新しい意見が生まれ、対話の力が感じら
れます。

教育とは何かというのは、答えが無い問いです。そ
れでも考え続けることが重要で、それを教育の軸
とし、実践していくことが必要になります。教員だけ
なく、教育を受ける側の学生を含めた教育に関わる人た
ちに読んでもらいたい本となっています。

予測困難な時代を生き抜くためにも、「教育」その
ものに対する考え方やあり方を見つめ直す有益
な本です。

<学び★サプリ>

2020 Vol.18

黒は悪なのか

学習アドバイザー 是澤克哉

奴隷解放記念日の6月19日、AP通信は、BLM (Black Lives Matter) 運動の影響を受けて「人種、民族、文化的な文脈で黒人という言葉を使う場合にブラックの『B』を大文字表記にする」ことを決定しました。黒人はアフリカから奴隷として強制的に米国に連れてこられ、新しい土地で言語や料理、ファッションなどを生み出しました。大文字にすることで黒人の歴史や文化を認めることになるとテンプル大学のサーブス教授は解説しています (New York Times 2014)。本来、小文字の black は色を表すことばです。しかし、大文字の Black は固有名詞であり、Latin (ラテン系)、Native (先住)、American (アメリカ人) と同様の歴史や文化を共有する人として表現することができます。今回の『学び★サプリ』では、否定的な含意 (Negative connotation) を持つことばを考えていきたいと思えます。

1950年以前のアメリカでは、黒人を指すことばとして「Negro (ニグロ)」が一般的に用いられていました。しかし、このことばは、白人によって名付けられ、差別的な意味を含むため、黒人自らが「Black」と呼ぶようになった背景があります。1950年代後半から活発となった公民権運動で叫ばれた "Black is beautiful" というスローガンは、"White is beautiful" という自明化されている美へのアンチテーゼとして生まれました。Black がつく否定的なことばは多いですが、この標語が歯止めとなり、黒を劣悪と結びつける造語が少なくなりました。

翻って、日本ではどうでしょうか。私自身もブラック (黒) を用いた否定的な造語をよく口にします。ブラック企業、ブラックジョークに黒歴史など。8月3日の朝日新聞の記事では、こうした傾向に黒人団体から疑問の声が上がっている現状を紹介していました。「ブラックという言葉は、黒人差別に使われてきた経緯もある。…だからこそ私たちは言葉のイメージを変えようと努力しているのに、日本では逆の状況が起きて悲しい (P.24)」。普段、何気なく使うことばが、否定的なイメージを無意識のうちに植え付け、差別を広げる実践となっていたことにショックを受けました。当然、「ブラック企業」と「黒人」を結びつける意図はないですが、黒人が奴隷として扱われ、不当な差別を受け続けている歴史を顧みれば、人種に関することばは、最大限の配慮を持って丁寧に扱われるべきなのです。

本来、日本語でも黒が持つ意味は多様でした。髪的美称として「黒髪」という表現があったり、利益を「黒字」と表現したり。しかし、いつしか和製英語として「ブラック」が定着し、語源を考えるとなく、「黒は悪い」というレッテルを貼っていたのです。先日全米オープンで優勝した大坂なおみ選手が、黒人の名前を記したマスクのメッセージを問われ、「あなたがどんな意味を受け取ったのか。その方が大事です」と答えました。ことばがつくる否定的な意味を変えることもまたことばの大切な役割ではないでしょうか。

これからの学習支援センターに向けて

学習アドバイザー 松村 一徳

丸4年間お世話になった本学を離れ、9月から大阪電気通信大学の教壇に立つことになりました。本学に来る前は留学生を対象とした日本語教育に主に取り組んでいましたので、学習支援も初年次教育も学習アドバイザーという仕事も、すべて一から勉強の日々でした。

長くも短い4年間でしたが、多くの先生方、職員の皆さん、そして学生の皆さんから色々なことを教えていただきました。心より御礼申し上げます。

勉強というのは不思議なもので、やればやるほど分からないことが増えていきます。最後の1ピースを見つけたと思ったら、埋まっていないピースが他にもあることに気づき、200ピースだと思ったパズルは実はもっと多かった、本学での4年間はその繰り返しの日々だったと思います。特に、学習アドバイザーという仕事の場合、必勝法やマニユ

アルのようなものは無く、目の前の学生がどういう人かを理解し、どのような言葉をかければ問題を解決できるのか、柔軟に考えなければなりません。

かつて「鉄人」と呼ばれたプロレスラーのルー・テーズは、まさに鉄のような強靭さとゴムのような柔らかさに富んだ筋肉を持っていた、と聞きます。74歳まで現役でリングに立ち続けたそうですが、長く続けるには硬さよりも柔らかさの方が大事であること、本当の強さとは柔らかさを備えていることを物語っています。私自身への戒めとして、またこれからの学習支援センターに向けてのメッセージとして、「柔軟であること」、「柔軟さを備えるまで研鑽を積むこと」を書き残したいと思えます。

編集後記

2020年8月末日をもって、学習アドバイザーの松村一徳さんが本学を退職されました。常に粘り強く学生に寄り添う姿が強く印象に残っています。次に赴任される大学での益々のご活躍をお祈りしています。(学習支援センター一同)



Hiroshima Shudo University

Learning Support Center
LSC NEWS LETTER
広島修道大学
Hiroshima Shudo University

発行日 2020年9月30日

発行者 広島修道大学学習支援センター

〒731-3195 広島市安佐南区大塚東1-1-1 TEL.(082)830-1426

E-mail skill@js.shudo-u.ac.jp

©LSC NEWS LETTER はホームページでもご覧になれます。